

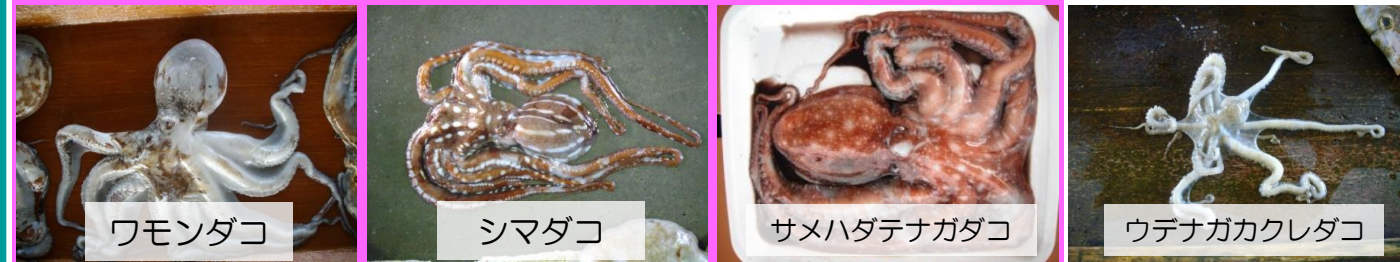
これまで、「さかなのおはなし」では、主に八重山のサンゴ礁に住む魚に関する話題を提供してきました。今回は、趣向を少し変えてタコに関する研究例などを紹介したいと思います。

八重山のタコ

八重山で漁獲対象となっているタコは、主に方言名で「島だこ(和名:ワモンダコ)」と呼ばれている白っぽくて大きなものです(下図)。他にも量は少ないですが「しがやー(和名:シマダコ)」や、「サメハダテナガダコ」が獲られており、これらは平成25年9月から漁業権対象となりました。漁業権対象になったことにより、海人は一般の人より優先してタコを獲る権利を得たわけですが、その一方で資源を持続的に利用していけるよう管理する義務も負っています。八重山では、他にも「うむずなー」や「むんつあん」と呼ばれている小型のウデナガカクレダコが利用されていますが、この種は漁業権対象にはなっていません。

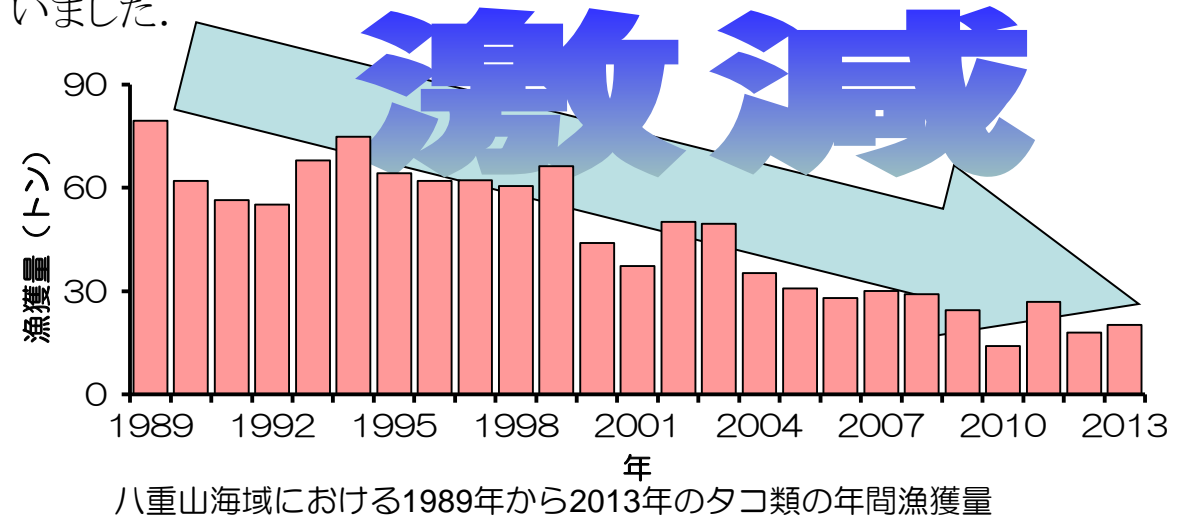
※漁業権対象種※

(画像：沖縄県水産課HPより)



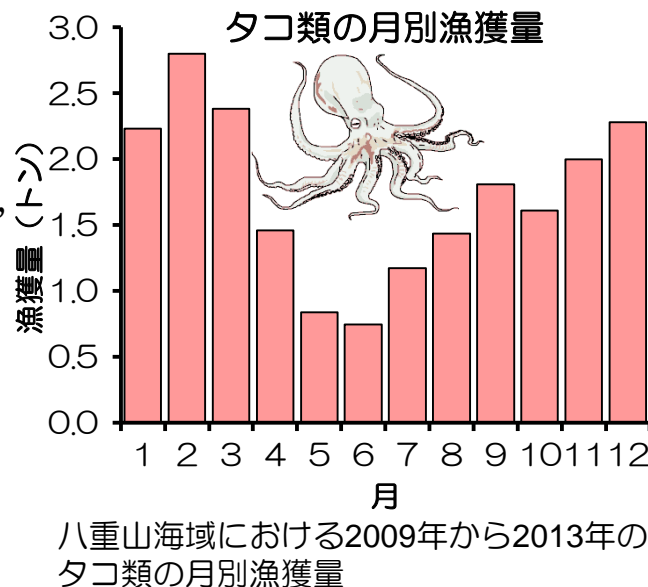
資源を合理的に利用していくために

八重山海域で獲られている沿岸性魚介類のうち、タコ類はハタ類、ブダイ類、フェフキダイ類に次いで漁獲量が多く(約20トン)、生産額も約2,000万円と大きいので、海人にとって非常に重要な資源です。しかし、その漁獲量はこの25年間で約4分の1にまで減ってしまいました。



タコの“寿命”は？

八重山多く漁獲されているくちなぎやみーばいの仲間は、20年以上生きることが知られていますが、「島だこ」の寿命は、なんと約13ヶ月と見積もられています。魚に比べ短命なタコですが、このため春から夏頃は大きな個体がおらず、漁獲量が少なくなります(右図)。しかし冬には産卵に備え、大きくなったタコが浅場にやってくるため、漁獲量が多くなります。



漁獲量が減ってしまった原因は、生息環境の悪化や、ヤナを知り尽くしたベテラン海人の減少、獲り過ぎなどと考えられます。減ってしまったタコを増やし、漁業生産を向上させるにはどうしたら良いのでしょうか？一つの方法として、小型のタコを獲らない、という方法が考えられます。前述の寿命などをもとに計算した結果によると、**2kgに満たないタコを完全に禁漁にすれば、漁獲量は1.3倍に増加するとされています。**また、1kgで制限したとしても、現状より資源の状態が良くなると推定されています。これは、未熟なタコを残すことで、産卵に参加できる親ダコの量が増えるためです。美味しい八重山のタコを持続的に利用していくためにも、一刻も早い対策が期待されます。

(参考：平成25年度沖縄県水産海洋技術センター普及に移す技術「ワモンダコの漁獲状況および資源管理策」)

